

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12541

研究課題名（和文）17～19世紀パリにおけるファッションを巡る産業の展開と奢侈

研究課題名（英文）Birth of the Parisian Fashion Industry and the Concept of Luxury in the 17th-19th Centuries

研究代表者

角田 奈歩 (TSUNODA, Nao)

東洋大学・経営学部・准教授

研究者番号：10623209

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：17～19世紀フランスにおいて、特権層のみがアクセス可能な奢侈と中～下層がアクセス可能な半奢侈とが拮抗しつつ「モード」を形成し、それらを供給する産業が成立した中で、前者の重要性が19世紀以降も維持された点がフランスの特徴であることを明らかにした。そこにはイメージ形成と、イメージを付加価値とする戦略も見て取れる。

さらに、レース業研究を進めることにより、布を巡る産業全般について新たな視点、すなわち、需給双方の要請を叶えるための「デザイン」の重要性を示した。

期間中は新型コロナ等により予定が大きく狂ったが、オンライン含む2回の研究会、国内外での調査を行い、主な成果は公表準備中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

17～19世紀フランスにおいて、特権層のみがアクセス可能な奢侈と中～下層がアクセス可能な半奢侈とが拮抗しつつ「モード」を形成し、それらを供給する産業が成立した中で、前者の重要性が19世紀以降も保たれた点がフランスの特徴であることを明らかにした。そこにはイメージ形成と、イメージを付加価値とする戦略も見て取れる。さらに、レース業研究を通じて、布を巡る産業全般について新たな視点、すなわち、需給双方の要請を両立する「デザイン」という視点を示した。期間中は新型コロナ等により予定が大きく狂ったが、オンライン含む2回の研究会、国内外での調査等を行い、主な成果は公表準備中である。

研究成果の概要（英文）：In 17th- to 19th-century France, the overlap between the true luxury only for the privileged social layer and the semi- or accessible- luxury for the middle and lower social layers had formed the "mode" and the industry to provide it. In this situation, the characteristic of France was that the importance of the former had maintained after the 19th century. France had also had the strategy to form the image of the "mode" and made it be the added value.

In addition to these views, this research offers the new point of view to understand textile industries, the "design", which is indispensable to combine the necessity of both supply and demand. In the research period, even if the Covid 19 forced the change of the program, we had held two workshops and investigation in Japan and in Europe and prepare to publish the results.

研究分野：ヨーロッパ史およびアメリカ史関連

キーワード：モード ファッション産業 パリ 18世紀 19世紀 都市史 商業史 レース

## 1. 研究開始当初の背景

ファッションは、領域を問わず、長らく学術の場で論じられない事象だった。そして「ファッション」と最も直結すると思われる衣も、歴史学においては軽視され続けてきたテーマである。ヨーロッパ史においてはアナル学派の台頭により衣が射程に入る可能性が生じたが、それでも具体的な研究成果はほとんど見られないままだった。1980～1990年代になると P. Perrot や D. Roche が歴史学における衣の軽視について問題提起し、1990年代以降のポストモダンの学際志向の広まりに歴史学も影響を受け、他の諸領域と同様に、ある程度の個別研究は現れた。しかし、日本では家政学などの場で学術性を保てるだけの方法論を欠いた論が「服飾史研究」として続けられてきたという事情があり、また社会学や表象文化学などにおいて、マイナー・テーマへの射程の拡大を重視するあまりか、実証性の欠如した言説も目に付く。そして論文検索が容易になった昨今、これらの学術的精度が低い「研究」が歴史学者含め諸領域の研究者に安易に引用され、ときに誤謬の再生産がなされているのが現状である。

一方、綿織物の国際取引・製造・消費を軸としたグローバル・ヒストリーについては B. Lemire, Cotton, 2011 や G. Riello, Cotton, 2015 など、特に 2010 年代以降、目覚ましい成果がある。このように、歴史学というより経済史において、特にグローバル・ヒストリーの傾向を持つ布についての課題には大きな進展が見られる。

しかし、こうした近年の成果の中でも、時にはそれを事象として、あるいは主題として扱いつつも、「ファッション」という語の定義は共有されていない。そもそも、布についての研究は古くからの蓄積があり、さらに近年の展開も大であるが、衣についてはいまだ手薄である。

また近年、グローバル・ヒストリーの枠組みでの諸研究においては従来「周縁的」とされてきた地域や事象に着目したり、中心性を排除したりする傾向が見られるが、これが布や衣の研究にも影響を及ぼしている。ファッションの中心地はパリであったとされつつも、逆にそのために分析の上でパリが除外される向きがある。一方で、いまだそのような発想の前段階にも至らず、実証を伴わずに安易に「パリ中心主義」に陥っているような見解も消えてはいない。

## 2. 研究の目的

このような状況を鑑み、以下 2 点を本研究の課題とした。

### (1) 「ファッション」とはなにか

「ファッション」を最も体現してきたと考えられる衣について、「ファッション」の成立過程を産業の成立と結びつけて分析することにより、歴史的事象が「ファッション」と呼び得る要件を考察し、「ファッション」という語を歴史学において定義する。

前述の通り、ファッションという語はいまだ明確に定義されていない。経済史の文脈では Riello と McNeil は *The Fashion History Reader, 2010* で「歴史的プロセスの結果」、「歴史的変貌の消極的受容者であると同時に、変化の活発な形成者」としているが、これは性質の説明に過ぎない。商学においては Nystrom が *Economics of Fashion, 1928* で経済的観点からある種の流行論を扱っているが、これも定義を行っているわけではなく、経営学や商学においてファッションという事象そのものについての議論がその後深まったわけでもなかった。思想・哲学においては Barthes の *Système de la mode, 1967* 以降様々な言説があり、表象文化学や社会学などでのファッションを巡る言説もこの流れに位置するものが多く、特に Merleau-Ponty や鷺田清一などの議論やその影響を受けたものが見られるが、必ずしも歴史学においてそのまま利用できる定義ではなく、また定義を行わないまま論を進めているものも散見される。歴史学において定義を試みている例は発見できていない。

### (2) なぜパリという都市は衣を巡る「ファッション」の中心地となったのか

「ファッション」におけるパリの中心性とそれが成立した要因を、ファッション産業と「奢侈」消費を巡る都市文化という面から実証する。

近現代の世界各地でファッションについてパリの影響が強く見られることは個別研究によって明らかだが、逆にそれゆえに、衣のグローバル・ヒストリーにおいてパリは研究対象から排除される傾向がある。衣もしくはファッションの歴史の中でパリが占める(と推測される)位置はあまりにも特権的であり、普遍性のある一事例にはなり得ず、垂直的「トップ・ダウン」の「トップ」と見なされてしまうため、衣の水平的なグローバル・ヒストリーを描く上での障害になっているためだと思われる。一方で、無批判にパリの特権性を信じそれを前提とする論も絶えない。しかし、パリを避けて衣とファッションの歴史を考えるのは不可能であり、またイメージのみでパリの中心性を語ることも無論許されない。

ここで Berg が *Consumers and Luxury, 1999* で提議した semi-luxury という概念(これは Coquery により *Tenir boutique à Paris au XVIII<sup>e</sup> siècle, 2011* で demi-luxe とフランス語訳されている)、また Riello が「糸・布・衣の循環史研究会」2015 年国際会議で打ち出した accessible luxury という概念を併せて「半奢侈」とし、この観点からパリの「ファッション」とそれを製

造・流通するシステムについて分析する。

### 3. 研究の方法

フランス他ヨーロッパでの現地調査を多く計画していたが、**2020～2021**年度は新型コロナウイルス流行により実質的に研究が休止状態となり、**2022**年度もまだ渡航に制約があったため渡欧できなかった。また、協働をお願いしていたフランス **EHESS** の **Larissa Zakharowa** 氏が研究期間の初期に惜しくも急逝された。これらにより計画を大きく変更せざるを得なくなり、合計**3**年の延長期間を申請し、ワークショップをオンライン配信にするなどの調整も必要となった。また**2023**年度はサバティカルにより**1**年間在仏となったため、それに合わせて調査先なども当初の予定から変更した。

#### (1)18～19世紀におけるパリの商業的トポグラフィとファッション・センターの形成過程

**18～19**世紀に発行された商業年鑑掲載の手工業者／小売商住所録と古地図を基礎史料とし、また現存する都市構造物のフィールド・ワークにより都市構造などを把握した。史料収集はオンラインでも行ったが、フィールド・ワークと共に諸調査を**2018**年度、**2019**年度、**2023**年度に現地で実施した。

さらに、形成過程を考えるためには、形成の末に行き着いた状況との比較が必要と考えられたため、**2023**年度の在仏時に現状調査を行った。フィールド・ワークと共に、オンライン業種別住所録 **Pages Jaunes** を利用し、情報をデータ集計した。当初は研究計画の対象期間である**19**世紀が完結した直後の**20**世紀初頭の状況との比較を検討していたが、その時期のパリ都市計画などについての研究者に相談したところ、おそらく利用可能な史料はないとの見解だったため、改善の策として現在との比較という案となった。

#### (2)パリとフランス宮廷における「奢侈」布消費の実態と、西ヨーロッパにおける「奢侈」布製造の実態

主にレースを対象とし、**Archives de Paris, D5B6 / D4B6**の破産した手工業者／小売商の帳簿と破産文書を基礎史料とする予定だった。これについては**2018**年度、**2019**年度、**2023**年度にパリで調査・収集を行った。当初はこれらを含め、文字史料を中心とした研究を想定していたが、調査を進めるにつれ、実物と現存技術を利用する必要性に思い至った。

**2018**年度にカレとアランソンで調査を行ったが、特にアランソンでは文書館から紹介いただいた現地大学院生 **Isabelle Ivon** 氏（カン・ノルマンディ大学）が博物館や市内をご案内下さり、非常に豊かな知見を得られた。しかし同時に、極めて厳しい史料残存状況も知ることとなる。その経験から、現存する実物や保存的に継承されている技術を研究に使用する必要性を痛感し、以降のレース業関連調査では、文字史料の残存状況を窺いつつも実物と現存技術に重点を置くこととした。また、当初は手工業（が主流だった時代）のみ、フランスのみを研究対象として想定していたが、工業化以降もまだ手工業が続いていたこと、工業化以降の産業と手工業に相互影響があったこと、フランス一国だけでは捉え切れない複雑な技術移転や人的交流があったことが判明し、西ヨーロッパ全体に調査対象を広げることとした。そこで、**2018**年度にはヴェネツィアでの調査を追加し（これは当基金ではなく学内研究費から支出）、**2019**年度にはブルッヘ、シャンティ、コドリで調査を行うと共に、ライデンの **Textile Research Centre** で開催されたレース識別法ワークショップに参加し、実物の年代や産地を識別するための知識を得た。また、渡欧できなかった**2020～2022**年度にかけては、自分でポピン・レース製作に取り組み、より技術の理解を深めた。**2023**年度にはザンクト・ガレン、ノッティンガム、ロンドン、カレ（再訪）で調査を行った。

さらに、レース業調査を進めるうちに、同様に奢侈を体現する布であった絹織物や絹リボン、特にそれらの価値を上げる紋様織りを実現するために導入されたジャカード技術や刺繍機械技術についての理解が不足していることも実感された。そのため**2023**年度には、かつてのフランス絹織物業の中心地リヨンでイベント”**Silk in Lyon**”に参加して各所の工房や博物館で調査を行った他、「リボンの都」サン＝テティエンヌ工芸産業博物館と、さらに、**19**世紀後半～**20**世紀初頭にヨーロッパからジャカードや刺繍機械の技術を移転し、それを保存的に利用している、もしくは独自に展開させている状況を調べるため、京都市の西陣織会館、和歌山市のニット・メーカー島精機のフュージョンミュージアム、さいたま市のオリオン・レース工業を見学した。

#### (3)「半奢侈」概念の導入による既製服製造業の展開の分析

上記 **D5B6 / D4B6** の既製服製造業者の文書、商業年鑑の広告部分などの史料は、現地文書館及びオンラインで収集した。既製服販売に従事した新物店の内部文書については残念ながら発見に至らず、おそらくほぼ失われていることが明らかになった。

#### (4)「ファッション産業」形成過程についての他諸国との比較

これは当初の計画にはなかったが、**Zakharowa** 氏急逝により計画の再考が必要になり、またレース業調査を進めるうちにヨーロッパ他国や他地域との相互影響についてもさらに考察が必要と思われるようになり、フランスの状況との異同を理解するため、他国との比較を新たに研究

に加えた。現地調査や言語の制約などもあり、自分で調査を行うのは難しいため、先行研究や、各地についての研究を行っている研究者との協働により知見を得た。

#### 4. 研究成果

##### (1) それぞれの方法から得られた知見とその公表

3. (1)については概ねデータ整理は終わったものの、在仏中に用いることができた機材の性能の制約もあり、まだマッピングに至っていない。この課題については、統計地図作成やデータベース共有といったデジタル・ヒストリー的方法論の問題と併せ、発展的に今後も研究を継続し、論文として公表する他、データベースそのものの公開も検討する予定である。現時点で言えることとしては、現在パリに「ファッション・センター」はファッション傾向に応じて分かれて複数存在するが、それらは部分的には18世紀から生じ始め、19世紀前半の間に一定以上に確立したと言える。服飾関係業は他の職種より特定地区への集中傾向が強く、「センター」の形成が見て取れる。そして、集中が早く、古くから発展していた地区の「センター」は現在ではオート・クチュールのメゾンなどより真の「奢侈」を提供する場になっている一方で、集中が遅く、より周縁的な地区に位置する「センター」は、現在では若手デザイナーなどより「半奢侈」的な店が集まっていると考えられる。このように、オスマン大改造と並行して起きた百貨店とオート・クチュールという近代的ファッション産業の成立より前に、パリの中で奢侈と半奢侈の拮抗が進んでいく様子が商業的トポグラフィの分析からも示される。

3. (2)については、ヴェネツィア調査期間が急な博物館閉館中だったことや、調査を進めるうちにさらに調査対象とするべき生産地が見出されていることから、総論的な成果公表にはまだ尚早と考えている。ただし一部成果は2019年度に論文、2021年度に口頭発表として公表した。そういうわけでこの問題についてはまだ長期的視野での研究の端緒に就いたところと考えているが、現時点で最も重要と考えている点は、布における「デザイン」という研究視点を得たことである。奢侈を体現する布であるレースや絹織物、リボンなどは、その美になによりも商品としての価値がある。そして19世紀以前において、布や衣服における美とは「手を掛けて作られたように見える複雑な外観」であったと考えられる。しかし、手が掛かる＝労働集約性が高いということは、18世紀時点であってさえ、高価格からの売れ行き不振を招いた。そこで19世紀に入ると、機械化や分業により労働コストを下げつつ「手が掛かっているように見える外観」を維持する方策が図られる。この需要と供給の双方の要請を満たす具体的な方策が「デザイン」である。レース業調査によって得られたこの視点の導入により、他の産業の展開、あるいは衣服製造・流通についても、新たな知見が得られることと思う。また、(2)については実物や現存技術を観察し、ときには自分で取り組むことでそこに費やされた技法や時間、手間を理解し、それが必要となり実現された当時の市場と産業のありようを考察するという方法論の開拓も大きな成果である。

3. (3)については2019年度にリヨン第2大学 **Natacha COQUERY** 教授を招聘し、城西大学井上直子講師（当時；現准教授）にもご参加いただいて、ワークショップ「奢侈／半奢侈とファッション」を開催し、「18～19世紀におけるフランスの「モード」と奢侈／半奢侈」と題して発表を行った。得られた知見は以下の通りである。**COQUERY** 教授による18世紀パリにおける（主に布や服飾品以外の）小売業における奢侈と半奢侈の位置付け、奢侈要素の強い絹織物の中での銘仙という半奢侈商品についての井上講師による考察と併せ、18～19世紀パリでのモード関係業の展開と奢侈・半奢侈の関係を分析したことにより、パリの衣服製造業において半奢侈が台頭する中でも奢侈が意義を持ち続けたこと、また奢侈レンジ、半奢侈レンジ共に、ファッション性を実現するのに付加価値が重要であったことが明らかにされた。

3. (4)については2021年度にオンライン・ワークショップ「ファッションが産業になる：フランス、アメリカ、日本、ソ連、イタリアの過去とインドネシアの現在」を開催した。安城寿子准教授（阪南大学）、日野真紀子准教授（近畿大学）を招聘、平芳裕子准教授（神戸大学）、野中葉准教授（慶應技術大学）をオンライン接続の形で編成し、故 **Zakharowa** 氏の研究についてもご著書の内容を紹介する形で取り上げた。結果として、パリに留まらず、また時代もより幅広く、ファッション産業の様々な事例について考える機会となった。この成果については、報告者や出版社と協議しつつ、書籍としての出版を目指している。このように17～20世紀フランスと、19～20世紀アメリカ、明治・大正・昭和期日本、ムッソリーニ二期イタリア、フルシチョフ期ソ連、そして現在のインドネシアにおけるファッション産業創出の試みを比較したことで、得られた知見は以下の通りである。実質的に失敗に終わったソ連の試みを除き、一定の成功を収めた（収めると思われる）各国の例の中で、先発性によるイメージ形成の利があった点、奢侈を維持した点がフランスの特異性であったと考えられる。またフランス、イタリア、（失敗した）ソ連、インドネシアは国家のイニシアティブが強く、アメリカと日本ではそうではなかったが、前者については多かれ少なかれ先発のフランスの方策を参考にした点、（模倣ではなくても）共通した点が見られ、後者でもすでに確立している「パリのファッション」をどのように自国に取り入れるかという要素が見られ、コルベール期以来、戦略的に奢侈を重視し、ファッションの発信地化を狙う産業政策をとってきたパリの先発性の利点が強くと見出された。

## (2)問題設定についての見解

2. で示した(1)「ファッション」とはなにか、(2)なぜパリという都市は衣を巡る「ファッション」の中心地となったのかについて述べる。

(1)については、まずフランス語「モード」との関係を考えねばならないが、「モード」は時期により意味が異なり、宮廷における「ドレス・コード」の意味から始まり、都市における「流行」という意味が派生した。そして商品レンジとしては前者は奢侈、後者は半奢侈に対応する。この両方の意味が含まれる状態が一定期間続いたことはフランス語「モード」の重要な点であり、ほぼ後者しか示さない「ファッション」との差異である。しかし、やはり「ファッション」を端的に定義するのは極めて難しいが、少なくとも以下の必要要件を現時点では想定する。a. マスになること、b. 変化すること、c. それがファッションであると認識されること、の3点である。服飾についてこのすべてを満たす状況が可能になり始めたのがヨーロッパにおいては18世紀後半のことであり、機械化や既製服の登場により19世紀にこの3点を完全に満たす商品を供給・消費することがむしろ主流になっていく。つまり「ドレス・コード」としての「モード」の要素を含まないことこそが「ファッション」であり、その中核をなすのは半奢侈であり、それを実現したのは(工業化のみならず産業の確立という意味も含めての) **industrialization** であり、それゆえに地域や時代を限定せず拡散し得る現象となったと考える。

(2)については、他国に先駆けて戦略的にイメージ形成に成功し、そのイメージを付加価値とすることができた点がまず重要である。さらに、半奢侈主体の「ファッション」が服飾品製造・流通・商品において重要になっていく中でも奢侈を維持したことがフランスの特異な点であり、その奢侈の存在こそがイメージの維持に寄与した。

## (3)これからの課題

以上のように一定以上の成果を得られたが、公表がまだのものも多いため、まずは公表に取り組む。また本課題の遂行を通して「デザイン」という視点、研究手法など、より発展させるべき新たな課題も見出した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 角田 奈歩	4. 巻 95
2. 論文標題 実物資料と現存技術に基づく17～19世紀西ヨーロッパのレース製造業史研究の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経営論集	6. 最初と最後の頁 161-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 角田 奈歩
2. 発表標題 モードの国の創出：17～20世紀フランスにおけるファッション産業前史と黎明期
3. 学会等名 ワークショップ「ファッションが産業になる：フランス、アメリカ、日本、ソ連、イタリアの過去とインドネシアの現在」、糸・布・衣の循環史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 角田 奈歩
2. 発表標題 フルシチョフ期ソ連におけるファッション産業創造の試み：故Larissa ZAKHAROVA氏のご研究を基に
3. 学会等名 ワークショップ「ファッションが産業になる：フランス、アメリカ、日本、ソ連、イタリアの過去とインドネシアの現在」、糸・布・衣の循環史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 角田 奈歩
2. 発表標題 実物資料と現存技術に基づく 17～19世紀西ヨーロッパのレース製造における「デザイン」を巡る試論
3. 学会等名 第119回史学会大会 西洋史部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 角田奈歩
2. 発表標題 18～19世紀におけるフランスの「モード」と奢侈／半奢侈
3. 学会等名 糸・布・衣の循環史研究会ワークショップ「奢侈／半奢侈とファッション」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nao TSUNODA
2. 発表標題 Textile beyond Fibers: Laces in the 17th-19th Centuries
3. 学会等名 Textiles and Materiality: Mixing Fibres between East and West, 16th-20th Centuries (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 上垣 豊 編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 346
3. 書名 はじめて学ぶフランスの歴史と文化	

1. 著者名 内村理奈 編著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 226
3. 書名 ファッションビジネスの文化論(改訂版)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Researchmap  
http://researchmap.jp/NaoTsunoda/  
researchmap  
https://researchmap.jp/NaoTsunoda/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
糸・布・衣の循環史研究会ワークショップ「奢侈／半奢侈とファッション」	2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フランス	EHESS		
フランス	LARHRA		